

# 図書館だより

北海学園大学附属図書館報 第29巻2号(通巻182号) 2007.7.18

vol.29

NO.

2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

北倉公彦

## 2 私は何をどのように 読んできたのだろうか



## 3 大濱徹也 涙 — 大地に生きる思い —

## 4 苑田亜矢 公文書館を辿って

## 5 赤石篤紀 「本のススメ」

## 6 越前谷博 工学部図書館にて — 学生時代を振り返って —

## 7 図書館レポート 2007

## 8 本城誠二 文学はしみじみだ

図書館からのお知らせ  
編集後記

# 私は何をどのように 読んできたのだろうか

文＝北倉公彦

(きたくら ただひこ／経済学部教授)

私には、図書館や読書に関して人様に自慢できることもないので、ここでは、専門書以外にどのような本をどのように読んできたのかを振り返ってみることにした。

私が初めて本を手にしたのは漫画であったと記憶している。昭和20年代、楽しみは漫画本と週に1度巡回してくる紙芝居くらいであった。むしろテレビなどはなかった。

漫画の多くは“少年”などの月刊誌とその付録であるが、たくさんの漫画を読むためには、数冊を抱えて友人の家を訪ね回って交換しあうしかなかった。しかし、そこには、「又貸しはしない」というルールが確立していた。漫画に飽きたら三角ベースの野球であったから、漫画が友人とのコミュニケーションに重要な役割を果たしてくれたのである。

小学校の高学年になると図書委員を仰せつかり、学校の図書館の本を級友と争うように読んだ。伝記ものが中心であった。中学から高校時代には、幸いにも“世界文学全集”をもつ友人がいたので、学校の帰りに彼の家で読ませてもらった。当然、読みきれないのでいつも借りてくることになる。

全50数巻を借りて読み終えたが、中でも強烈なショックを受けたのがノーベル文学賞を受賞したパール・バックの“大地”である。封建制が残る中国を舞台に、極貧の農民女性の動物的なお産の場面から始まるのであるが、読み始めると止まらなくなり、学校をサボって円山公園で一気に読んだ。

高校時代から南米での牧場経営を夢みていたので、大学に進学してからは、農学や獣医学の本ばかりで、途中から農業経済学に関心が移ったものの、大学・大学院を通じてほとんど小説は読まなかった。

社会人になってからは、出張の連続であったので、その間に手当たり次第に読んだが、日本文学が中心であった。数年間、日本の古代史とくに邪馬台国に熱中したが、今でも邪馬台国九州説を確信している。

好きな作家は山本周五郎と司馬遼太郎である。彼等の著作はほとんどすべてを読んだ。山本周五郎の小説は、場面描写が想像をかきたてる。また、司馬遼太郎は小説もよいが、随筆や対談集も内容が濃い。購読していた“文藝春秋”からは多方面の知識と様々な考え方を学んだ。

小遣いの大半は本の購入費に消えたが、読み終えた本は仲間に譲ることにした。その本を読んでくれた人と、感動を共感したり、批評しあうことができるからである。

まさに乱読といわれる読み方をしてきたが、その中で一つの工夫をした。1冊を読み終えたら、その中で最も気に入った数行を抜き書きするのである。このノートは今でもいろいろな場面で役に立っている。

# 涙

— 大地に生きる思い —

文=大濱徹也

(おおはま てつや/人文学部教授)



道南の山越郡八雲町大新部落会館の構内地に「涙」と刻された歌碑があります。

涙 うきときもうれしきときもせきあえず  
なかるものはなみだなりけり

きとう  
鍛

(碑の裏面)

八雲町農村振興の恩人 大島鍛先生の遺徳を永く記念するため 没後五十年 命日にあたり有志相はかりこの碑を建てる

昭和五十九年十一月二十一日

大島鍛先生歌碑建立期成会

大島鍛は、1886（明治19）年16歳の秋、尾張徳川家の八雲開拓殖民に応じて移住した少年の一人です。これら少年は、望郷心の強い成人と異なり、「思郷ノ念比較的淡白ニシテ移住地ヲ己ガ天地トナシ一意農耕ノ業ニ従事シ、成績良好」なため、3カ年にわたり毎年10名が募集され、幼年舎で学びながら徳川開墾地で開拓に従事しました。1888年の第3回移民としては鍛の6歳下の弟大島叔蔵が幼年舎生として応募しております。

鍛は、将来の農業指導者となるべく、徳川家より派遣されて札幌農学校農芸伝習科に入学、翌89年に帰村、鷲の巣青年舎に入り、新しい知識と技術で舎生を指導し、事実上の監督の任を果たし、自力経営に努め、新しい村づくりをめざしました。青年舎の客間には、「三余」の額が掲げられており、青年に勉学をうながしました。「三余」とは、勉学によい三つの余暇のことで、「年の余りである冬」「日の余りである夜」「時の余りである陰雨の日」のことです。舎生はこの三余の時を活用して学んだわけです。鍛は、これらの幼年舎、青年舎出身者の指導者であり、やがて1912年に初代徳川農場長に就任、理想郷八雲建設をめざし、酪農八雲の基盤をつくりました。

大島兄弟は、開墾生活の苦闘を神の試練（コリント人への第一の手紙 10-13）と受けとめ、賛美歌404番などを口ずさむなかに明日に思いをさせたのです。この404番は、北海道の大地に生きた開拓者にとり、心に響く賛美歌として愛唱されております。

山路こえて ひとりゆけど  
主の手にすがれる 身はやすけし  
されども主よ われいのらじ  
旅路のおわりの ちかかれとは  
日もくれなば 石のまくら  
かりねの夢にも み国しのばん

八雲の大地に生きる鍛を支えたのは、聖書と賛美歌であり、内村鑑三の著作でした。鍛は、厳しい開墾生活に明日の理想を忘失しがちな青年に読書を奨

め、共に本を読むことでいかに生きるかを問いかけました。その居宅「土の家」での読書会は、青年たちにとり、明日の村づくりを語り明かす楽しい一刻であったと回想されています。青年と共に生きようとした鍛を支えていたのは、中村正直の『西国立志編』や内村鑑三の『後世への最大遺物』が説き明かした世界、「勇ましい高尚なる生涯」を生きぬくために現在何をなすべきかを日々の生活の中で問い続け、豊かな人生をきずきたいとの思いでした。太田正治は、この志をもつていかに生きるかという問いかけを全身で受けとめ、青年の日に読んだ内村鑑三の『デンマルク国の話』を終生の心の糧とした一人で、1952（昭和27）年に北欧を訪れ、小中酪農家の経営の実際を学ぶという積年の夢を実現します。その地には『デンマルク国の話』で語り聞かされた世界が現在も生きていることを実感しました。

『デンマルク国の話』は東京柏木の今井館における1911（明治44）年1月の講演をまとめたものです。内村鑑三は、1864年にプロイセン・オーストリア連合軍に敗北したデンマークが領土の一部を奪われた時、工兵士官ダルガスがユラン半島の植林をなし、豊かな樅の森を造成し、国土を再生する物語を、外に失った領土を内に求めた「信仰と樹木とをもつて国を救いし話」として紹介しました。この荒野に挑む働きは、原野に汗して鋤を入れる青年の心を激しく打ち、感奮せしめたのです。

大島鍛による読書の奨めは、八雲の青年の心に火をともし、明日を生きぬく豊かな想像力もたらす糧となりました。これらの青年は、1934年11月21日に大島鍛の長逝を受け、その蔵書を大島文庫となり、「明日の八雲を、然して明日の農民生活を」の標語を高く掲げ、鍛の志を受け継ぎます。私は、1985年末に太田正治翁を訪れた時、青年の身体に打ち込まれた師大島鍛の棘の深さに思いをあらたにしました。翌86年より太田翁は、師大島鍛の壟（ひそみ）にならい、八雲の地に読書する喜びを根付かせるべく読書運動を始めました。思うに八雲町立図書館が北海道内でも優れた図書館である背景は大島鍛の「涙」に支えられた働きを受け継いだ世界があるからにはほかありません。

北海道の大地に立ち、涙の谷に生き、己の人生をきり拓いた大島鍛の思いに心をいたし、現在おかれている北海道、さらには「品格」とか「美しい国」などという空疎な言葉のみが乱舞する日本の姿を問い質したいものです。現状に流されるのではなく、この現実を撃つには己が理想をもたねばなりません。理想なくして現実の把握はできないのです。そのためにも八雲の青年の心を激しく打った内村鑑三の『後世への最大遺物 デンマルク国の話』を読んでみませんか。大地に生きて在るとは何なのでしょう。

# 公文書館を辿って

日本の国立公文書館のホームページを見ると、この公文書館の所蔵資料の中に、日本国憲法や大日本帝国憲法、勅書、法律などの公布原本があることが分かります。「終戦の勅書」の原本がその一つとして画像によって紹介されており、「天皇御璽」の印も確認できます。

私達は、このような公布原本を直接目にするのはあまりありませんが、今日その内容は官報によってなされる公布により正確に知らされます。

こうした状況は時代や場所が変わると異なります。例えば、12世紀のイングランドではどうだったのでしょうか。

当時のイングランド国王ヘンリ2世（在位1154-89年）は、コモン・ロー形成史上大変重要な人物です。「偉大な立法者」だったとも評価されています。しかし、この「立法」を今日と同じ意味で理解してはいけません（ちなみに議会はまだ成立していません）。公布という語についても同じです。加えて、公文書を保管するという体制もまだ整えられていませんでした（「公」概念をこの時代に用いるのも注意が必要です）。

ヘンリ2世によって定められた法は、constitutions、assize、statute、edictなど様々な語で表されていますが、それらについての王国の公式記録は現存しません。オリジナル（いわば公布原本）は残っていないのです。それはなぜでしょうか。

いくつか考えられる原因の一つは、文書保管庫（archives）のあり方に関係しているように思われますが、先に、国王の印璽と、国王文書を作成する機関の話をしておきます。国王の印璽は、すでにヘンリ2世の頃には用いられていました。もっとも、ここでいう印璽は、ヨーロッパに広く見られたものと同じく、蠟の上に、硬い金属などに彫られた図像や文字が刻印されたものをいいます（上の写真、参照）。

この国王の印璽の保管責任者がチャンセラーという機関の長です。チャンセラーは、当時、各地を巡行する国王とともに移動しながら、国王文書を作成



## 文=苑田 亜矢

（そのだ あや／法学部准教授）

していましたが、作成した国王文書を通常業務として保管することはしていませんでした。

その試みが始まるのはジョン王の治世（在位1199-1216年）です。ただし、チャンセラーで作成された文書が一つの定まった場所に保管されるのはまだ先のことです。

そもそも、文書だけを保管するための定まった一つの場所というのは、長らく存在しませんでした。文書は、国王と関係の深い修道院などの宝物庫、王国の財務をとりあつかう機関となる財務府、そして国王の寝所など、こういった場所にある箱などの中に収められていました（文書保管庫を表すarchiva—単数形はarchivum—というラテン語は、箱を表すarchimiumと関係があるようです）。

それでも14世紀には、チャンセラー関係の文書はチャンセラーの書記の宿泊所跡にできた建物で保管されるようになったようです。その頃からこの建物のある通りは「チャンセラー・レーン」と呼ばれるようになります。

それから4世紀以上の時を経て、1838年の公文書館法によって初めて創設された公文書館（Public Record Office）があったのがその通りです。公文書館は、それまでロンドン塔やウエストミンスター修道院などで保管されていた別の文書も含め、およそ公的といわれる文書のすべてを保管するための一歩を踏み出します。

その後、公文書館は、1977年に、ロンドンの西にあるキュー（Kew）という場所に移り、現在は、国立公文書館（The National Archives）と呼ばれています。

# 「本のススメ」


文=赤石篤紀

(あかいし あつのり/経営学部准教授)

別に確固たる信念があるわけでもないから気の利いたことをいえるわけでもないし、「昨日、キューバから帰ってきて、云々」というような刺激的な生活をしているわけでもない。かといって、家族がいるわけではないから、「子供がどうの」という話もできない。仕事以外で自分の研究について書く気も起こらんし、うーん、書くことがない。

てなわけで、適当に面白いと思った本をピックアップすることにします。まあ、世の中には「読むべき一冊」とか「心の一冊」といったたくいの特集や記事もあったり、入試案内でも「好きな本」なんかで紹介されるぐらいだから、これはこれで有用な情報になりえるのだろうし、本の紹介を通じて、ひとりの人間の心の深遠をみることができるとい意味では、面白いのかも知れない。

では、まず一冊目。E・フロム『愛するということ』(紀伊国屋書店)。原題は『The Art of Loving』というらしい。題名だけをみると、はやりの恋愛指南書やマニュアル本のような印象を受けるけど、NYで出版されたのが1956年で、色んなところで読まれているらしい。色んな愛、親子の愛や兄弟の愛、神の愛などについて書かれている。もちろん、異性との愛についても。彼の言わんとするところは、愛するというのは無償で与えるということであって、もらうものではないし、見返りを求めて行うものではないということ。与えた結果として、与えられるということか…。で、愛の基本的な要素として、配慮、責任、尊敬、知をあげて、こんなことも言ってる。「配慮が欠けているところをみてしまったら、例えば彼(彼女)が相手のことを考えずに何かを与えたり、あるいは与えることそのものを怠っているところをみてしまったら、彼(彼女)が愛していると言ったとしてもその言葉を信じることはできないだろう」と。また、フロムは利己主義と自己愛を比較してみたり、平等の概念についても考えたりしていて、中々面白い本となっている。実践は難しいけどね。



二冊目。J・ジェイコブズ『市場の倫理 統治の倫理』(日経ビジネス人文庫)。この本では、「なぜ様々な政治的・経済的な不祥事が起こるのか」、また「そのような不祥事が起こらないようにするためにはどうすればいいのか」について、人間の社会的生活の倫理的な基礎(道徳)、つまりは“よいとされる行い”を考えることを通じて明らかにしようとしている。これだけみると、堅苦しそうだけど、登場人物による対話形式をとった論理展開の方法にあるので、途中からはすんなりと読める。また有史以来の道徳について色々な文献に依拠しながら考えているので、パッチワーク的な楽しさもある。この本で学べるものは、「一級の知性とは何ぞや」ということかな。

三冊目。天童荒太『幻世の祈り』他4冊(新潮文庫)。これは普通の小説。だいぶ前に読んだので内容の詳細は覚えていないけど、テーマは家庭内暴力とか虐待。えてして高評価だし、いい本と思う。私的には、「人のために」と思ってやったことが逆に恨みや憎しみを買う結果を生んだり、いくら頑張っても事態が好転するどころかむしろ悪化したり、不幸が不幸を呼ぶという世の中に当たり前にあるであろうことを、臆面もなく描いているところが気に入っている。で、それでも生きていかなければならない人の世の悲惨さ…。うーん、辛いな。

この三冊に共通していえることは、「独り善がりはダメだよ」ということ。今回の文章、かなり独り善がりなんだけどね。じゃあ、また今度。



# 工学部図書館にて —学生時代を振り返って—

文=越前谷博

(えちぜんや ひろし/工学部助教)

私は北海学園大学工学部電子情報工学科の第1期生である。学生時代には、当然ながら図書館を何度も利用させていただいた。特に、工学部所属の私は、山鼻校舎の図書館では講義の間などのまとまった空き時間ができると頻繁に利用させていただいた。

私だけでなく多くの学生にとって、図書館は友人との絆を深める場としても大きな役割を果たしていた。講義などで課題が出されると、真っ先に図書館に向かう。図書館で情報収集を行わなければならない意識はもちろんあるが、同時に、図書館に行けば誰かいるのではないかという期待も持ちながら訪れていた。出された課題が難しいほど、一人だけで取り組むのは心細い気持ちになるが、友人と一緒にそれが解消される。つまり、自分が考えた解答が本当に正しいのかどうかを確認することができる。また、自分一人だけだと行き詰ってしまい、解答にたどりつけない場合でも、違った視点で友人に指摘してもらおうと、一気に解決するということがよくあった。仲間と共に共通の目的に向かって団結することで強い連帯感が生まれ、楽しく課題に取り組むことができた。そして、気がつくとも閉館の時間になっているということもよくあった。

定期試験の時期になると図書館は大盛況となり、大変な賑わいであった。一人用の机は空きがあっても、複数の人が座れるテーブルには空きが全くない。また、コピー機の前にはかなり長い列ができる。当時の図書館の職員の方々には、大変ご迷惑をお掛けしたであろうと現在は思える。しかし、私も含め、当時の学生は定期試験を乗り切るために皆必死であった。そのときばかりは、普段あまり話をしない学生同士も一致団結し、定期試験に立ち向かっていた。日頃めったに見かけない学生もこの時期になると姿を現す。この人は同じ学科の学生だったのかと気づか

されることもあった。この時期の図書館における賑わいを見て、職員の方々や先生方は、大変奇妙な現象だと思われたに違いない。そして、定期試験が過ぎると、図書館はいつもの落ち着きを取り戻す。卒業するまでこのようなことの繰り返しであった。私にとっては、全て大変懐かしい思い出である。

そして現在、私は課題を解答する立場ではなく、課題を作成する立場になった。更に、学生を取り巻く環境もインターネットの出現により激変した。インターネット上の検索サイトからクエリを入力することで簡単に得たい情報が入手可能となった。しかも、家庭へのパソコンの普及が急速に進み、大学にいるのと変わらない環境で自宅でも課題に取り組むことができるようになった。課題を作成する教員側も授業支援システムWeb Tubeを利用することで、インターネットを介しての課題の提示が可能である。また、携帯電話を誰もが持ち歩くようになり、直接顔を合わせなくても学生同士のコミュニケーションが成り立つ時代である。私が学生の頃とは生活環境は激変した。

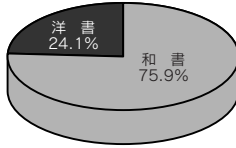
このような変化は良い点もあれば悪い点もあると思う。ただ、私の見る限りにおいては、学生の本質的な部分はそれほど変わっていないように思う。今でも定期試験が近くなると図書館内では、コピー機の前には列ができたり、学生達の話し声で賑わう光景が見受けられる。そのような光景を目にし、「図書館内では他の人に迷惑を掛けないように、静かにしなさい」と教員の立場としては言いたくなる反面、今も昔も変わらぬ光景に微笑ましい気持ちにもなる。やはり、今も昔も最終的には友人と集まり、共通の問題に取り組むことで安心感が得られるのではないだろうか。図書館がそのような場を提供する役割を担っているのはそう悪くないことだと思う。

# 図書館レポート 2007

## 蔵書冊数 (2007年3月31日現在)

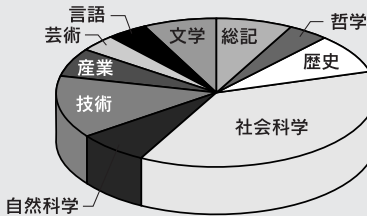
	和書	洋書	合計
蔵書冊数	609,318冊	193,742冊	803,060冊

ちなみに2006 (H18) 年度の1年間の受入図書冊数は、28,514冊でした。学術雑誌は、9,000種を超えるタイトルを所蔵しています。



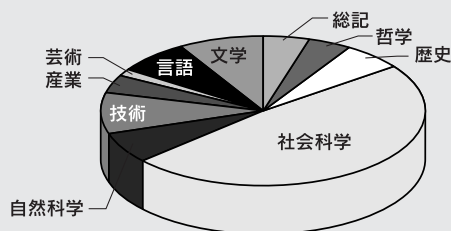
### 【和書】

000 総記	45,905	7.7%
100 哲学	24,296	4.1%
200 歴史	51,465	8.6%
300 社会科学	223,610	37.4%
400 自然科学	43,156	7.2%
500 技術	81,238	13.6%
600 産業	37,351	6.2%
700 芸術	21,861	3.7%
800 言語	24,555	4.1%
900 文学	44,422	7.4%
計	597,859	100%



### 【洋書】

000 総記	8,886	4.6%
100 哲学	8,265	4.3%
200 歴史	11,548	6.0%
300 社会科学	93,816	48.5%
400 自然科学	12,975	6.7%
500 技術	17,260	8.9%
600 産業	7,525	3.9%
700 芸術	2,872	1.5%
800 言語	13,977	7.2%
900 文学	16,484	8.5%
計	193,608	100%



※論文、除籍は除く

## 一カウンター・サービス関係統計一

	2004年度	2005年度	2006年度
入館者数	405,999人 (1日当り1,440人)	399,609人 (1日当り1,412人)	378,822人 (1日当り1,343人)
貸出者数	延べ36,771人 (うち学生 25,384人)	延べ37,062人 (うち学生 34,276人)	延べ42,990人 (うち学生 37,393人)
学生一人当りの貸出回数	4.1回	4.1回	4.3回
貸出冊数	46,493冊 (うち学生 35,632冊)	61,810冊 (うち学生 55,856冊)	76,434冊 (うち学生 57,961冊)
学生一人当りの貸出冊数	5.2冊	6.9冊	6.6冊
PCブース利用者数	延べ 3,145人	延べ 3,197人	延べ 6,073人
AVブース利用者数	延べ 3,515人	延べ 4,244人	延べ 5,793人

## 一レファレンス・サービス関係統計一

### ●学内レファレンス業務

	教職員 (前年度対比)	学生 (前年度対比)	その他	合計 (前年度対比)
文献所蔵調査	54件 +23件	111件 +18件	11件	176件 +52件
事項調査	4件 -7件	9件 -2件	7件	20件 -2件
利用指導	10件 +10件	20件 +19件	0件	30件 +29件
その他	3件 +1件	2件 +2件	3件	8件 +6件
合計	71件 +27件	142件 +37件	21件	234件 +85件

### ●相互協力業務

#### 1. 複写業務

	国内 (前年度対比)	国外 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
依頼	592件 +62件	15件 +8件	607件 +70件
受付	1,684件 +831件	0件 ±0件	1,684件 +831件
合計	2,276件 +893件	15件 +8件	2,291件 +901件

#### 2. 貸借業務

	国内 (前年度対比)	国外 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
依頼	141件 -31件	1件 -1件	142件 -32件
受付	432件 +203件	0件 ±0件	432件 +203件
合計	573件 +172件	1件 -1件	574件 +171件

#### 3. 文献所蔵調査

	国内 (前年度対比)	国外 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
依頼	18件 -5件	0件 ±0件	18件 -5件
受付	19件 +14件	0件 ±0件	19件 +14件
合計	37件 +9件	0件 ±0件	37件 +9件

#### 4. 他館への利用願

	国内 (前年度対比)	国外 (前年度対比)	合計 (前年度対比)
依頼	52件 +3件	4件 -1件	56件 +6件
受付	23件 -6件	0件 ±0件	23件 -6件
合計	75件 -3件	4件 -1件	79件 ±0件

# 文学はしみじみだ

人文学部 <sup>ほんじょう</sup>本城 <sup>せいじ</sup>誠二 教授

Seiji Honjo

人文学部の「英米文化基礎演習」で学生に自己紹介をしてもらおうと、大方の学生は英語がうまくなりたいというこちらの予想通りの希望を語る。教師としてはそのような学生を、文学の楽しみを知り、小説を読む喜びを発見するように誘導しようと手ぐすね引いて待っている。

しかし「文学離れ」が進行する現実の中でどのようにすれば文学の良さに気づいてもらえるかが問題だ。「文学離れ」の理由の一端は、難解な、政治的な道具としての文学に辟易したのではないかと想像できる。とすれば、分かりやすくてかつ中身の濃い小説を紹介したら、学生も含めて世の潜在的読者が読んでくれるだろうか。ただ分かりやすくてかつ中身の濃いというのが難物で、ここでは文学的な質が高く、しみじみとした読後感に浸れるようなものをイメージしている。分かりやすくて、しみじみとして、かつ文学的に質の高い作品を読んでもらいたい。そして、少量の切なさを含んでいればさらにいい。

そのために、仲間と作ったのが『しみじみ読むアメリカ文学』（松柏社）だ。6名のアメリカ文学研究者がそれぞれ2作ずつ担当し、有名・無名の作品を12作そろえた。僕はユダヤ人作家マラマッドの「夏の読書」、とR・ポーシュの「二人の聖職者」を訳した。このアメリカ短編翻訳集の話は2005年秋に起こり、2006年3月までに作品を選び、9月末に原稿を提出、そして2007年6月ようやく世に出る事になった。その間、作品はいいのだが長すぎるとか、著作権が高すぎるとかの文学とは関係のない現実的な問題も生じた。

しかし、この短編集の発刊は、作品選出の過程自体が僕個人にとっての戦後アメリカ小説の復習になったし、翻訳作業は英語と日本語の勉強になった。また若い女性編集者の言葉に対する繊細で、正確な指摘にとっても助けられた。その成果であるこの翻訳短編集が、文学研究者から文学を愛する人たちへの贈り物になることを願ってやまない。

ちよつとここで本の紹介です。



## 図書館からのお知らせ

除籍図書をご自由にお持ちください！

現在、図書館では、昨年度発生した除籍図書の無償提供を実施しております。対象図書は図書館（本館）2階閲覧室にて展示中ですので、お時間のある方は、ぜひ一度図書館までお越しください（なくなり次第、終了します）。なお、展示内容・期間は随時更新されますので、あらかじめご了承ください。

## 編集後記

みなさんこんにちは。ビッグフットです。いよいよ暑くなってきて夏本番！といった感じの今日この頃。花火大会やお祭りなんか気がなりますが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。さて、みなさんは夏らしい本って、持っていますか？音楽や食べ物にも「夏らしい～」があるように、「夏っぽい本」という感じで。どうでしょう、なかなかバツと思い浮かばないかもしれませんね。ビッグフットの個人的な夏の本は「楽園大百科」請求記号748/MIY 所蔵ID：0548540です。南国の魅力がぎゅっと詰まった常夏な本です。他には、抜けるような夏空色の「少年」請求記号911.56/CHI 所蔵ID：0557017、なんかも良い感じです。試験には役立ちそうにはありませんが、他にも色々な「夏の本」がありそうです。今年の夏は、そんな「夏の本」探しをしてみようと思うビッグフットでした。

みなさんも夏の思い出に本を1冊加えてみてはいかがでしょうか。…その前に、特盛アイス食べなくちゃ！！

北海学園大学附属図書館報 図書館だより 第29巻2号（通巻182号）

本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南26条西11丁目1番1号  
TEL (011) 841-1161（本館内線）2273・2274・2275（工学部内線）7813・7814 印刷所：（株）アイワード